近江荒都の歌

——柿本人麿作歌注釈　その1——

森　朝男

本稿は万葉集に収められた柿本人麿作歌のすべてについて継続的に書き継がれる注釈の最初の一編である。稿を起こすに際し、はじめにこの注釈の基本的姿勢について述べておきたい。

古典の注釈の歴史は古典語の語義的解釈を中心としてきた。万葉集の場合にはその解釈ということに先立って、いま一つ、訓読という問題が存在した。和文の表記史の最初期に当る、いわゆる万葉がなによる表記は、まずその訓読を経なければ解釈作業に進めなかったのである。万葉集の注釈の歴史は訓読と解釈の歴史であった。そしてその二つは時には交錯し、相互的な関係を有しもしたから、訓読と解釈の間を往来するようにしながら、注釈は進められてきた。万葉集注釈の形式は、基盤のところは、今後ともそのようであり続けるだろう。

しかしそうした基盤的部分と分離したかたちではなく、それにつきささり、それと相乗作用をひきおこすような方法で、いま一つ新しい注釈作業がそれに加え合わせられてゆかねばならない。その作業とは歌語論的な方法による注釈作業である。

歌語論的方法というのは、歌のことばを語彙論的に解釈するのでなく、一つの慣用として、表現様式としてとらえ、

その慣用的な型がどのようにして成立したかを考察する、という方法である。一例を挙げる。近江荒都歌の冒頭は、「玉襷畝火の山の橿原の日知の御代ゆ」と始まる。このうちの「畝火の山の橿原」という部分は、七音句から五音句へ続くところでもあり、この形でとり出されて注釈の対象語句とされることは、一般には採用されない方法であるかも知れない。しかし歌句としては、いまあえて「畝火の山の橿原」といういい方に注目してみる必要があるのである。下に述べるとおり、神武天皇の「橿原宮」をいうときには、「畝火（山）の橿原」というふうに繋げていう形式詞章があり、この歌句もそこに生成の基盤を有しているのである。そのことを注せずに、畝火山や橿原の所在地、それらの歴史的・神話的所出などを注しても、あまり意味はない。すなわち和歌のことばを形式から考察することである。和歌のことばがそれでありうるわけは、もっぱらこの形式性によるのであるから、この視点は重要である。

さてこの歌語論的方法というものは、いってみれば歌のことばを意味の方から見るのでなく、生態の方から見るということになるわけであるから、古代の場合には、必然にことばを神事・祭式あるいはそれらに準じるような諸々の営みの中において見ること、あるいはそれらの営みの中のことばに根拠を置くものとして見ることになってゆく。もちろんその場合、神事・祭式等はことばの発せられる環境としてではなく、ことばそのものがそれらを内在するような関係として、あくまでことばそれ自身の問題として見ることにならねばならない。それはいうまでもないことである。

筆者は志を同じくする何人かの古代文学研究者たちとともに、右に述べたところと近似する考え方から、古代語について個別的に考察する試みをなした。それらは『古代語を読む』『古代語誌』（一九八八。一九八九。ともに桜楓社）の二冊にまとめられている。いまここになそうとする柿本人麿作歌への注釈は、同じ試みを和歌の注釈という形式に、すなわち古代和歌の古代和歌としての解読に向けてみようとするものである。

右のような姿勢によってなされる本注釈はいきおい歌句の注に重心を置くものとなる。一首全体について作品論的

な論点があるとしても、一般の注釈書が語釈や口訳のあとにそれを論ずる項目を特立するようにはなるべくしないこととする。そのような論点は歌句への注釈の中になるべく吸収させるのが、めざすべき注釈の姿であろうと思うからである。ただし歌句への注釈をふまえたうえで特筆すべきことがある場合、または注釈部分にはどうしても述べきれないことがある場合などは「補説」を立項することとする。

その他に、注釈に際して留意する点について述べる。

まず本文は西本願寺本によるが、必要に応じて他の諸本により改めることとする。訓読は現在行われる諸注の標準的な訓法をなるべく尊重し、疑義や特に主張したい異訓の案のない限り、それらに従って定めることとする。本文・訓読文は歌の末尾に巻数と歌番号を付して掲げる。

注釈は、現行の諸注に共通してよく触れられ、あえていうまでもなく一般に受け容れられている事柄については、なるべく記述を省略することとしたい。煩雑になるのを避けるためでもあるが、めざすべき歌語論的な注釈の色彩を顕著にしたいからでもある。

口訳は付さない。口訳の必要を認めた語句についてのみ、これを注釈の中で果すこととし、全文の訳文は省略する。

＊　＊　＊

過近江荒都時柿本朝臣人麻呂作歌

玉手次　畝火之山乃　橿原乃　日知之御世従〔或云自宮〕　阿礼座師　神之尽　樛木乃　弥継嗣尓　天下　所知食之乎〔或云食来〕　天尓満　倭乎置而　青丹吉　平山乎超〔或云虚見倭乎置青丹吉平山越而〕　何方　御念食可〔或云所念計米可〕　天離　夷者雖有　石走　淡海国乃　楽浪乃　大津宮尓　天下　所知食兼　天皇之　神之御言能　大宮者　此間等雖聞　大殿者　此間等雖云　春草之　茂生有　霞立　春日之霧流〔或云霞立春日香霧流夏草香繁成奴留〕　百磯城之　大宮処　見者悲毛〔或云見者左夫思母〕（1・二九）

反歌

楽浪之　思賀乃辛碕　雖幸有　大宮人之　船麻知兼津（1・三〇）

左散難弥乃　志賀能〔一云比良乃〕　大和太　与杼六友　昔人二　亦母相目八毛〔一云将会跡母戸八〕（1・三一）

近江の荒れたる都を過ぐる時柿本朝臣人麻呂の作る歌

玉襷　畝火の山の　橿原の　日知の御代ゆ〔或は云ふ、宮ゆ〕　現れまししし　神のことごと　樛の木の　いや継ぎ継ぎに　天の下　知らしめししを〔或は云ふ、めしける〕　そらにみつ　大和を置きて　あをによし　奈良山を越え〔或は云ふ、そらみつ大和を置きあをによし奈良山越えて〕　いかさまに　思ほしめせか〔或は云ふ、思ほしけめか〕　天離る　夷にはあれど　石走る　淡海の国の　ささなみの　大津の宮に　天の下　知らしめしけむ　天皇の　神の命の　大宮は　此処と聞けども　大殿は　此処と言へども　春草の　繁く生ひたる　霞立ち　春日の霧れる〔或は云ふ、霞立ち春日か霧れる夏草か繁くなりぬる〕　ももしきの　大宮処　見れば悲しも〔或は云ふ、見れば悲しも〕（1・二九）

反歌

ささなみの志賀の唐崎幸くあれど大宮人の船待ちかねつ（1・三〇）

ささなみの志賀の〔一に云ふ、比良の〕大わだ淀むとも昔の人にまたも逢はめやも〔一は云ふ、逢はむと思へや〕（1・三一）

○玉襷　「懸く」「畝火」に懸る枕詞であるが、「畝火」に懸けた例は集中に少なく、この歌の例などがそのうち最も古い。「懸く」の枕詞であったものを人麿が初めて転用したとも考えられる。肩に懸けることを「うなぐ」といっ

た（16・三八七五）のによる。『万葉集全注』巻第一（伊藤博）もふれるとおり、襷を肩に懸けるのは神事の営みである。「木綿襷肩に取り懸け」（19・四二三六）の例がある。それと並ぶ祭神の叙事形式として「玉襷――（肩に取り）懸け」などといった伝襲の詞句があり、その「懸け」を口に懸けたり心に懸けたりする意の方へ用いたのが枕詞「玉襷」の発生でもあろうか。

○畝火の山の橿原の「観れば、夫の畝傍山の東南の橿原の地は、蓋し国の奥区か。」（神武紀即位前己未年三月）、「古語に称して曰さく、畝傍の橿原に宮柱底磐の根に太立て、高天原に搏風峻峙りて、始馭天下天皇を号けて神日本磐余彦火火出見天皇と曰す」（同紀元年正月）などの例に見られるように、神武天皇の橿原宮の地は畝火山と関連づけながら称する習いになっていたようである。畝傍山は宮地の橿原の指標とされたのであろう。「橿原の畝傍の宮に」（20・四四六五）の例もある。出雲国造神寿詞には、大なもちの命が三輪・葛城・明日香・雲梯の四座の神を「皇御孫の命の近き守神」として奉り置いたと見える。この四座の所在地を対角線状に結ぶと、地図上その交点は畝傍山に一到する（拙稿「遷都」雄山閣版『万葉の虚構』所収。他にも）。四至をその四座の地に限った聖空間の中央に畝傍山が立つ（国の奥区）のであり、その畝傍山の地が「皇御孫の命」たる初代天皇の宮地であったのである。聖なる山とその麓の宮殿との関係は、神体山と山麓の社（三輪大社など）の関係にも等しい。また行幸の行宮造営の好地として「山の辺の五十師の原」（13・三二三四）といった例などは、〈畝火の山の辺の橿原〉に対応するように思われる。

○日知　ひじり（聖）の仮名書き例としてめずらしい。「ひじり」が日を知る（支配する）ことを原義としたらしいのを暗示してもいる。天皇を「聖帝」と記した例が仁徳記に、また「聖君」「聖天皇命」と記した例が続日本紀宣命に見える。

○現れましし神のことごと　「現る」は神霊が現世に示現すること。示現した神のそれぞれが、の意。代々の天皇についてそのように観念しているのである。〈現人神〉の思想であるが、ここは宮居のことをいう文脈なのでことさ

ら意識的に「現(あ)る」の語を用いたのだ。すなわち神殿がこの世に示現した神の居所であるとどうじに神の示現そのものの姿であったように、宮殿は神としての天皇の威容を示すものであった。宮殿をいう「みあらか」の語は、〈御(み)―現(あ)れ―処(か)〉の義である。下文への続きからすると、代々の神（天皇）が出現する聖地大和とは別に、天智天皇は聖地の外の近江に出現した、ということになるのである。

○樛の木の　「継ぎ継ぎ」に懸る枕詞で集中他にも例がある（3・三二四、6・九〇七など）が、「樛木」と表記したのは異例。小島憲之『上代日本文学と中国文学（中）』に「樛木」は毛詩周南（樛木）などに出、蔓類のからまる枝の垂れた木を意味するので、「天皇が歴代の天皇に続いて――あたかも蔓草が長く続いてまつはり茂る如く――つぎつぎに天下を幸福に治める意」に当てて用いたものだと説く。興味深いが、蔓類の木の枝などにからまり茂ることが、文字どうり「上下倶盛」（鄭箋）、すなわち治天下の理想の譬えにはなっても、代を継ぐ譬えになりうるのだろうか。その例が欲しい。

○そらにみつ　「そらにみつ」は『萬葉集注釈』（沢瀉久孝）にいうとおり古形「そらみつ」を人麿が五音形に整えたものであろう。人麿は古い枕詞を再生したり、新作の枕詞を編み出したりしている。近藤信義『枕詞論』の序は、枕詞という表現形式が歌の世界に豊かに放出された始まりは人麿においてであったとし、宮廷儀式歌の共同性を支えることばとして、始源の表現を〈装う〉ところの枕詞形式が求められたのだという。

○大和を置きて　聖地（天皇が天皇として出現し、宮居を構える地）の大和を捨て置いて、その外に誕生することをいう。これが後文の大津宮廃亡の背景であるとにおわすかのようである。なおその大和の地の聖地性を支えているのが、畝火の橿原宮の神話的規範なのである。

○あをによし奈良山を越え　奈良山は大和国北辺の国境線をなす。したがってそれを越えることは、青垣山に囲まれた聖域の外に出ること、「玉牆の内つ国」（神武紀三十一年）の外に宮居を置くことを意味する。

○いかさまに思ほしめせか　山本健吉『柿本人麻呂』など以来挽歌の慣用句（死者の他界行きをいぶかる意の）と説かれて来、実際挽歌に例が多いが、ここはそれと等しなみには見られない。いぶかりを向ける事柄が違っている。ここは天智天皇が夷の地に宮居を定めたことをいぶかっているのである。このいぶかりの内容について考察した論のうち最も詳細なものは、やや古い論考ながら杉山康彦「人麿における詩の原理」（『日本文学』一九五七年十一月号。有精堂日本文学研究資料叢書『万葉集Ⅰ』にも）である。ここには前代未聞の遷都に対する讃嘆と不安との双方がある、というのである。大筋のところそんなふうに読んでよいものであろう。「めせか」は、「めせばか」の意。どのようにお思いになってのゆえか。

○天離る夷にはあれど　「天離る」は「夷」の枕詞。都を「天（あめ）」とし、そこから隔たり離れること（戸谷高明「『天離る鄙』の意味」『古代文学の天と日』）。ここは大和を本来ないし伝統的に都の置かれるべき地として、大和を中心にいっている。だいたい「天（あめ）」というのは聖領域を指していうものであるから、地上にも存在する。天上界と同等の資格に当るところをそう呼んでいるのである。「天の香具山」などはその好例であるが、さらに「天の高市」（神代紀上）や「天の二上」（中臣寿詞）などにも天上と地上の結合混乱を認めてよいだろう。高市も二上も大和の地名であるが、もともと地上の「天（あめ）」は大和を指していて、たとい近江の大津に都が出来てもそこは「天（あめ）」にはならず、あくまで〈夷の都〉なのである。因みにいえば、「畿内」という概念なども同様に神話的な大和中心の観念に依拠している。したがって都が近江や山城に移っても畿内五国の内容は改めないのである。大津京は畿外の都でもあったことになる。このこと拙稿「近江荒都歌の風土学」（雄山閣版『万葉集の歌人と風土』所収）にやや詳しく述べる。

○ささなみの大津の宮　「ささなみ」は琵琶湖西岸一帯を指した地名。「狭々波山」（欽明紀三十一年七月）、「筱浪」（天武紀元年五月）などが見える。万葉集中には「ささなみの比良山」といった例もあり、大津京周辺のみでなくさらに北方の湖岸地域をも含んだもののようだが、郡郷名などには出ない。万葉の段階で「志賀」にいい懸けた例が他

を圧する傾向を見せ、後世には「志賀」の枕詞というべきものになっている。「大津の宮」は大津市北部、現在の近江神宮の所在地あたりを中心とした、湖岸地方で最も平地の広がった地域に京域の所在が想定される。宮地は詳しくは分らない。

○天の下知らしめしけむ天皇の神の命　前引神武紀元年正月の「古語」にいう「畝傍の橿原に宮柱底磐の根に太立て、高天原に搏風峻峙りて、始馭天下天皇」の例などもその範囲のものであるが、歴代の天皇を指し示す定型的呼称は「……（宮）に天の下知らす天皇」というかたちをとる。万葉集巻一・二の御代の名の標記などもそれに習っている。ここも古詞章伝来のその形式による。ただしここはさらに「神の命」を添えている。「すめらみこと」をいま一つ細やかにいえば「すめろきの神の命」ということになるわけなのであろう。天皇をそのように呼んだ例は3・三二二など数例見えている。「知らしめしけむ」と推量形を用いたのは、廃墟を前にしてのありし日の都のとらえどころなさを表現する技巧と見られる。この部分、下の「すめろき」に続く連体修飾格と見てよい。「けむ」は連体形。それは上の「思ほしめせか」に呼応する係り結びとしてではない。連体修飾格としてである。

○春草の繁く生ひたる　次の「霞立ち春日の霧れる」とともに、宮殿が無に帰して目に見えぬことを表現したもの。丈高い春草の茂みに隠れたのか、春の霞に隠れたのか、といった趣きである。

○霞立ち春日の霧れる　「霞立」を「霞立つ」とする訓もある。「霞立つ」は「春日」の枕詞として用いられる句であるが、そのときの「春日」は例外なく「春の一日」の意であって、春の太陽、陽射しをいうと見えるここの場合に適合しない。また人麿の五音句は可能な限り枕詞的に理解する方がよいのであるが、ここは下に「霧れる」とある点から見ても、それとほぼ同じ意味を喚起してしまう「霞立つ」という枕詞をわざわざ冠したとは考えにくい。「霞立ち」と訓み、霞が立って春の陽射しがもやっている、と段階的にいったと見るのが解としても通りやすい。「霧れる」は動詞「霧る」に完了の助動詞のついたもの。動詞「霧る」は集中一例のみ。類似した表現としては「春の日の霞め

るときに」（9・一七四〇）がある。これは水江浦島子の歌の冒頭で、墨江（すみのえ）の春の海を眺めながら作者が浦島子の物語を思い起すのである。おぼろな霞や霧は幻想を誘うもので、ここも多少それらしいところがある。今は無に帰した宮殿の幻映を、春景の中に追っているのである。

○唐崎　大津市北郊の湖岸。平地が湖に突き出て岬になっていたものであろう。現在の地形は変っているであろうが、それに近い状態をとどめ、その岸辺に唐崎神社を祠っている。近江朝時代に湖上に出て船遊びをする拠点になっていたものらしく、また船着き場もあって船の出入りもあったもののようである。天智天皇崩御の折の歌に「やすみししわご大君の大御船待ちか恋ふらむ志賀の唐崎」（2・一五二）とある。平安中期には唐崎はみそぎの霊場とされた（広和三年御記・蜻蛉日記など）。またそれより早く平安初期の嵯峨天皇朝には、近江に行幸した天皇がここで船遊びを行なっている（日本後紀弘仁六年四月）。こうしたことから憶測するに、唐崎は古くから琵琶湖の霊水信仰の拠点としての意義を担っていた可能性がある。そしてみそぎとは神霊を示現せしめることでもあったから、唐崎はすなわち湖上から神を迎える祭場でもあったのである。北西の古社日枝神社に伝わる中世の縁起類（耀天記など）には、日枝の大宮（現在の西本宮）の祭神大物主神（大和大三輪神）が天智朝に湖上に示現し、はじめ唐崎に上陸したと説く。こうした話がどこまでさかのぼれるか分らないが、古くから唐崎に神霊漂着の伝承が存在した可能性はあるのではないかと思われる。岬は神の漂着する場所である。そうした唐崎の湖岸の祭祀観念が、この歌の大宮人らの再生、再来、それを待ち迎える唐崎の地といった表現内容を支えているものと思われる。なお以上のこと拙稿「近江荒都歌の風土学」（前掲）に詳述した。

○幸くあれど　無事であるけれど。昔のまま変らぬことをいったものととれる。「唐崎」のサキからの音の反復による連接法で、他にも「白崎は幸くあり待て」（9・一六六八）の例もあり、一つの型となっているものである。しかしこれらは単に音のみによる連接ではなく、唐崎も白崎も神霊の憑り着くめでたき場所として、「幸く」と土地ぼ

め的にほめるいい方を有したのである。もともと、崎・咲・幸・裂などは同源の語である（折口信夫「国語学」全集19）。

○大宮人の船待ちかねつ　唐崎が大宮人らの乗った船の帰岸を待ちかねている、というのである。かつてこの地を賑わして今は姿の見えなくなった大宮人を、あたかも船遊びの船で湖上を沖へ漕ぎ出したまま帰らぬかのように歌っている。しかし前項に説いた唐崎の祭祀的性格からすると、これは大宮人の再生への祈りを底に置いた表現であることになる。「大宮人」は宮廷奉仕者。群卿百僚から女官たちをも合せたものであろう。人麿の歌にはこの語が多い。宮廷や天皇の繁栄をたたえるのに奉仕者の多数であることをいう形式が存在したらしい。それは宮廷賀歌の制作者たる宮廷歌人の歌の形式なのであった（拙稿「景としての大宮人」拙著『古代和歌と祝祭』所収）。ここはその形式を逆にして、奉仕者の大宮人が不在であることを歌って悲歌としたものである。

○志賀の大わだ　どのあたりとも知れない。琵琶湖の西岸に湾入して水の淀む所があったのだろうが、観念的に想定したものと見てもよい。「わだ」は吉野川の「夢のわだ」（3、三三五）の例もあり、川についてもいう。湾曲して入江のようになった所。異伝に「比良の大わだ」とある。比良にも離宮があったらしい。1・七歌の左注に「比良宮」とあり、また斉明紀五年三月に「近江の平の浦」行幸のことが見えている。比良宮の昔を追懐する歌に応用されたことがあって、異伝が生じたのかも知れない。

○淀むとも　前歌の「ど」が確定条件法で現在のことをいうのに対し、この「とも」は仮定条件法で、現在に未来のことをも重ねていっている。未来永劫に淀み続けようとも、といった意味あいのもので、前歌よりも強い悲情を表して、二首構成の効果が出た結果になっている。

○昔の人にまたも逢はめやも　「昔の人」は前歌の「大宮人」のいい変え。「逢はめやも」は、逢うことがあるだろうか、いや逢うことはない。「や」は反語。

〔補説〕長歌冒頭の十句ほど「玉襷　畝火の山の　橿原の　日知りの御代ゆ　現れましし　神のことごと　樛の木の　いや継ぎ継ぎに　天の下　知らしめししを」は、神武天皇の橿原宮のことをはじめに提示し、それ以降の代々の天皇の統治を概括的に叙している。ものごとを起源から歌い起す形式で、「天地の　分れし時ゆ　神さびて　高く貴き　駿河なる　不尽の高嶺を……」（3・三一七）などに単純で典型的な例が見える。起源や由来を歌うものはものを称える形式であるから、ほめ歌（この不尽の歌などはその例に入る）の場合に現れやすい。近江荒都歌は第十三句以下でその由来への背反である遷都のことが歌われている。そこにこの歌の悲歌としての形式の中心があるように思われる。そのような文脈のねじれは、二首の反歌の「ど」「とも」の逆接の接続助詞による上下句間の反転という構造にも出ていて、この作品の基本的性格になっている。そのような歌は人麿には他にもある。人麿作歌の文脈構成上注目されるので指摘する。